

## 九州支部

外とされるが、pmのみによってIV期とされる症例の中には、予後良好な例もある。12pm症例について検討した。臨床的に同一肺葉内にある症例は、2例共、3年以上生存、術後の病理診断によるpm症例でも7例中5例が3年以上生存した。pm症例は、今後検討されるべきと思われた。

#### 43. 肺癌切除後10年以上生存例の検討—特に重複癌発生との関連について—

長崎市立市民病院内科

石田一雄, 田畑 聡, 坂井秀章  
福田康弘, 福田正明, 伊藤直美  
中野正心

同 外科 中田剛弘

1976年1月より1980年12月までに当院で切除された肺癌症例18例のうち、10年以上生存例は6例でそのうち3例に重複癌が発生した。肺癌術後生存期間が長くなるにつれ、重複癌発生の頻度も高くなり、対策としては5年以内は勿論のこと、10年以上経過しても定期的な十分の観察が必要と思われた。

#### 44. 女性扁平上皮癌の臨床的検討

長崎市立市民病院内科

坂井秀章, 福田康弘, 石田一雄  
田畑 聡, 福田正明, 伊藤直美  
中野正心

同 外科 中田剛弘

過去15年間において当科で経験した女性扁平上皮癌は22例(全肺癌の3.6%)であった。そのうち8例は健診などで偶然発見されたものだった。喫煙率は59%と高率であり、男性同様喫煙との関係が示唆された。発生部位では、末梢が約2/3を占めた。

#### 45. 女性肺癌切除例の検討

大分県立病院胸部血管外科

森永真史, 内山貴堯, 山岡憲夫  
谷口英樹, 山崎直哉

女性肺癌113例では男性肺癌282例に比べ病期の早い症例が多く、組織型では腺癌が、分化度では高分化型が多かった。女性の扁平上皮癌は末梢型が多く、腺癌と異なり喫煙との関連が認められた。生存率は女性が男性に比べ有意に良好で( $P < 0.01$ )、これはI期と高分化例が多いことを反映したものと考えられた。

#### 46. 30歳以下の肺癌13例の臨床的検討

北九州肺縦隔研究会 真鍋英夫  
堀江昭夫, 寺嶋廣美

玉江景裕志, 下川路正健

津田 徹, 岩田定幸, 城戸優光  
白日高歩, 中田 肇

過去10年間の30歳以下の肺癌症例を調査した。男性4例、女性9例の計13例で、腺癌と気管支腺の癌が多く、3例が長期生存中で、死亡例の平均生存期間は10カ月で、若年者肺癌でも必ずしも予後不良とはいえない。

#### 47. 若年者肺癌の検討

熊本地域医療センター呼吸器内科 深井祐治, 千場 博

同 放射線科 吉岡仙弥

同 病理 蔵野良一

自衛隊熊本病院 柏原光介

中村博幸

8年間で40歳未満の肺癌は8例で全肺癌の2%であった。腺癌6例、小細胞癌1例、カルチノイド1例で腺癌の予後は一般に不良であるが、積極的に化学療法など集学的治療を行うことが延命につながるものと思われる。

#### 48. 肺癌症例における腫瘍マーカー、ST 439, BFPの有用性に関する検討

久留米大第1外科 小野博典

林 明宏, 足達 明, 奥 洋  
服部隆一, 那須賢司, 岩永 大  
掛川暉夫

原発性肺癌症例37例に対し、NCC-ST-439, BFP, CEA, SCCの4種類の腫瘍マーカーを測定した。NCC-ST439, BFPを加えたコンビネーションアッセイは、補助診断、治療経過のfollow upにおいて、有用であると思われた。

#### 49. 肺癌における塩基性胎児蛋白(BFP)値の検討

国療沖繩病院 久場睦夫

仲宗根恵俊, 宮城 茂

宮国孝彦, 大城 元, 大城盛夫

石川清司, 国吉真行, 板東 徹

下地光好, 源河圭一郎

肺癌41例中BFPの陽性率は71%で同時測定したCEAの陽性率に比し有意に高く、特にI期においても63%と高い感度を示した。またStageの進行度に並行して上昇する傾向が認められ、肺癌の補助診断上および進行度を把握する上で有用性が示唆された。

#### 50. HCG及びAlpha-fetoprotein産生肺癌と考えられた1例

伊万里市民病院内科 友永淑美

立石真子, 高尾雅己, 鶴田英夫

河野浩太

長崎大第1病理 永吉健介

岩崎啓介

症例は75歳男性。主訴は血痰、右S1に腫瘤陰影を認め、経気管支的肺生検にて未分化癌と診断を得た。またHCG 1.5 MIU/ML, Alpha-fetoprotein (AFP) 393ng/mlと上昇し、組織のHCG染色、細胞診のAFP染色で陽性所見を得た。以上、HCG及びAFP産生肺癌と考えられた一例を報告した。

#### 51. I期およびII期高分化型腺